

反転授業の実践報告: 教室内外で学習者をアクティブにする様々な方法

反転授業は、現在世界中で注目を浴び、実際に多くの教育機関で導入されている。反転授業を実施すると「アクティブ・ラーニングの時間の捻出につながり」(船守 2014)、アクティブラーニングを実施すれば対面授業は学習成果をより高める可能性がある(DELOZIER and RHODES 2016)。そのため、反転授業のコースを受けている学習者は「対面授業で得るのと同じようにビデオ講義でも必要な知識を得られ」、「アクティブラーニングの時間増加による学習効果の向上を学習者自身が感じている」(橋本 2017)ことが示唆され、実際に反転授業の学習効果が認められつつある。

ただ、反転授業の研究や実践者の話を聞くと、多くの場合が、予習に当たる「ビデオ講義」や「オンライン上の確認問題」などの新しいテクノロジーを使うことに焦点が当てられがちだ。しかし、あくまでも筆者が考える反転授業の一番大きな目的は、「アクティブラーニングの時間増加による学習効果の向上」である。故に、本研究では、新しいテクノロジーを用いるか否かに焦点を置くのではなく、学習者を教室内外でいかにアクティブな状態に保つのかに焦点を置きながら実践した様々な方法の反転授業について報告をする。

本実践は、アメリカ北東部の4年制大学の中級日本語コースで行われた。コース履修者の多くは学部生と大学院生で、日本語や日本研究が専門の学習者ではない。週5日60分の授業で、ほぼ毎日宿題が出される。コースでは、市販の教科書を用いず、大学独自のコースパッケージを用い、文法や単語を学びながら、日本の思想や歴史や時事問題などの生教材を読み、それについて学習者が話し合うというコースである。

反転授業の予習は読み物や宿題や動画資料をも含み(DELOZIER and RHODES 2016)、必ずしもビデオ講義が必須というわけではない。その観点から、本実践では、学習者を教室内外でアクティブな状態に保つために、以下のことを予習として捉え、実施した。

- ビデオ講義の視聴・オンライン上の確認問題
 - 読みや話し合いのため、その導入・背景知識を得る
- 会話ビデオの視聴・ハンドアウト記入
 - 悪い会話例のビデオを見て、それが「なぜ悪いのか」「どうしたら良くなるのか」をハンドアウトに書く
- コースパッケージの読み・ハンドアウト記入
 - 教室活動のために、文法の基礎知識を得る
 - トピックの理解やその話し合いのための知識を得る
 - 事前に渡された内容質問のハンドアウトに解答し、理解すべき点や理解できていない点に気づく

本実践では、学習者の予習がほぼ100%なされ、対面授業でのアクティブラーニングの準備がされた状態で学習者は教室に来る。学期末のアンケートでは、「lessons are dynamic, engaging, and enjoyable」「extraordinarily effective in guiding wonderful class discussions」「life lessons」などの好意的な意見を学習者から得られた。本研究では、対面授業でのアクティブラーニングの例や、話し合いを円滑に行う工夫、予習率を高める工夫などについても触れる。

上記のように、本研究では、学習者の学びをアクティブにすることが反転授業の目的であることを改めて明確にし、通常反転授業の実践では反転授業として扱われていない活動も反転授業に含め、その実践をシェアする。